

## 〈雑音〉としての「声」

——『源氏物語』の老女を中心に——

外山 敦子

### 一 「源氏物語」の「声」

「源氏物語」に登場する老女の「声」について考えてみたい。神話や伝承の世界では、「声」とは単なる音声ではなく、「呪力」あるいは「人格の象徴」といった性格を含み持つ側面があった。<sup>(1)</sup>「源氏物語」における「声」の意味と配置は、さらにそれだけにとどまらず、「声」の持ち主の〈身体〉や〈性〉の問題、身分などの〈社会〉や〈文化〉の問題、また「声」を発する人と、その「声」を聞く人との関係性の問題など、さまざまな問題を内包している。<sup>(2)</sup>河添房江氏は、「声」分析について、「さまざまなレベルで」「ポリフォニックな声の風景をテキストとして発見することがいま求められている」と、その研究上の可能性を示唆している。<sup>(3)</sup>本稿は、以上の状況をふまえながら、『源氏物語』における「声」の問題について、対象を老女の「声」に限定して考察を試みるものである。

そもそも、物語文学にとって老人とは、「沈黙」する存在ではなく、「声」を出して「語る」存在なのであった。<sup>(4)</sup>しかし、物語において「老人が語る」ことの意味が重要視されていながら、実は、その〈ことば〉が発せられるときの「声」そのものについては、これまで見逃されてきたと言わねばなるまい。<sup>(5)</sup>だが、物語は老女の「声」のありようを雄弁に語っている

のだ。<sup>6</sup>物語が老女の「声」について述べるとき、その声は、語り手や他の登場人物から古めかしく聞き苦しいと評価されることが多い。他者と共鳴する「声」ではなく、違和をもたらず「声」。「声」によつて発されたへことばⅡ内容Ⅱではなく、へことばⅡ内容Ⅱを発した「声」がどのようなものであるのか、それを他の人物がどのように捉えているのか。そこに注目し、物語のなかで「語る」役割を担った老女の「声」のありようを、そして物語における機能を明らかにしたい。

## 二 二 〈雑音〉としての「声」(一) — 朝顔卷 —

「源氏物語」朝顔卷は、源氏の朝顔の姫君への求婚と、それ故に生じる紫の上の苦悩を中心に語る巻である。まず巻頭で、朝顔の姫君が父桃園式部卿宮の服喪のためすでに斎院を退いていること、その朝顔に源氏がたびたび弔問していることを語った後、①光源氏が、朝顔と同居している叔母の女五の宮の見舞いにかこつけて桃園宮邸を訪れ、まずは女五の宮と対面する。②その後本命の朝顔の姫君のもとに渡り、求愛する。というパターンが二度繰り返されている。しかし、同じパターンを繰り返しつつも物語はその微妙な差異を語る。それは、結局朝顔の姫君が源氏を受け入れない、ということを手感させるものとなっているのである。

二度目の桃園宮邸訪問の際、源氏には一つの目的があった。朝顔への「一言、憎しなども、人づてならでのたまはせん」<sup>7</sup>「朝顔・四八五頁」という切実な訴えである。一言でいいからあなたの声を聞かせて欲しい。この訴えは、朝顔の発するへ声Ⅱさえ聞くことができれば、発された言葉のへ内容Ⅱは何であつても(たとえ「憎し」であつても)構わない、というところに他ならない。源氏が二度目の訪問で求めたのは、朝顔のへ言葉Ⅱではなく、「人づて」ならざる生身のへ声Ⅱであつた。簾越しに聞こえる女のへ声Ⅱは、男に、簾の向こう側にある女のへ身体Ⅱを想像させる。<sup>8</sup>源氏はこの時、朝顔が確かにそこにいることへの実感を求めていたのである。しかし、朝顔のたつたへ一声Ⅱに期待し気持ちを高ぶらせる源氏

の心とは裏腹に、この日、源氏は次々と邪魔が入りなかなかな朝顔のもとにたどり着くことができなかった。

宮には、北面の人のしげき方なる御門は、入りたまはむも軽々しければ、西なるがごとくしきを、人入れさせたまひて、宮の御方に御消息あれば、今日しも渡りたまはじと思しけるを、驚きて開けさせたまふ。御門守寒げなるけはひうすすき出で来て、とみにもえ開けやらす。これより外の男はたなきなるべし、ごほごほと引きて、「錠のいといたく錆びにければ開かず」と愁ふるをあはれと聞こしめす。「朝顔・四八一頁」

源氏は桃園宮邸を訪問するが、西側の正門は開いていない。そこで、人を呼んで開けさせようとするが、錠が錆びてしまつて門はなかなか開かなかつた。源氏はそれを見て「あはれ」と感慨を覚える。式部卿宮の死後、邸内は人少なくなり荒廢していることに対する同情の念である。「ごほごほ」と引かれる錠の錆びた正門は、故式部卿を失つた宮邸の凋落ぶりを象徴するものであつた。しかしここで注目したいのは、桃園邸の門がただちには開かず、源氏が邸外で余儀なく待たざるを得なかつた、という事実である。源氏は「ごほごほ」と不気味な音をたてる門を前にして、立ち往生するのだつた。門が開くまで「やや久しう」「朝顔・四八二頁」時間を無駄に過ごした源氏は、ようやく邸内に入るものの、すぐに朝顔と対面できたわけではなかつた。

宮の御方に、例の御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、ねぶたきに、宮もあくびうちしたまひて、「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらす」と、のたまふほどもなく、いびきとか聞き知らぬ音すれば、よろこびながら立ち出でたまはむとするに、またいと古めかしき咳うちして、参りたる人あり。「かしこけれど、聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にあるものとも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」など、名のり出づるにぞ思し出づる。「朝顔・四八二〜四

八三頁」

桃園宮邸訪問の名目は女五の宮への見舞いであるから、源氏はまず女五の宮と対面する。すでに老女になり果てた女五

の宮は、例によって源氏を相手に昔語りを始める。しかし宮の昔語りは留まるところを知らず、話疲れた女五の宮は「あくび」をし、とうとう「いびき」をかいて寝てしまった、というのだ。

ところで、朝顔巻冒頭で語られた一度目の桃園宮邸訪問の場面でも、女五の宮は源氏を相手に延々と昔語りをしていた。女五の宮は、「声ふつつかにこごちこしく」〔朝顔・四七〇頁〕、「咳せきがち」〔朝顔・四七〇頁〕な「声」で、桐壺院崩御後の心細い暮らし向きや、源氏幼少のみぎりの昔話、挙げ句の果てに、源氏と冷泉帝が似ていることまで、間断なく語り続けたのであった。ところが、今ここで取り上げている二度目の訪問の場面では、物語は女五の宮の昔語りの内容に、一切触れていない。これは、源氏が女五の宮の昔語りのへ内容（＝言葉）に、もはや全く注意も関心も払っていないということに他なるまい。心ここにあらざる源氏にとって、延々と続く女五の宮の昔語りなど、単なる耳汚しのへ音（＝雑音）でしかないのだ。そして源氏は、本来の目的にたどり着けないまま、そのへ雑音ノイズにまたもや延々と時間を消費しなければならなかったのである。

しかし、まだこれだけでは終わらなかった。ようやく女五の宮から解放されたにもかかわらず、さらに「いと古めかしき咳」が源氏を引き止めてしまう。「咳」の主は源典侍なのであった。しかし、源氏にはその主が誰であるか聞き分けることができず、「名のり」でようやく彼女を思い出すのであった。源典侍は、かつて桐壺帝後宮の華として活躍した才媛で、まだ若かった源氏が遊び心で近づいたこともあったほどである。その時、たとえ遊び心であったとしても源氏が源典侍に近づいたのは、源典侍の「声」に対する印象の深さゆえであった。

夕立して、なごり涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみ歩きたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きまたり。御前などにても、男方の御遊びにまじりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、もの恨めしうおぼえけるをりから、いとあはれに聞こゆ。「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうたふぞ、すこし心づきな

なき。〔紅葉賀巻・三三九〜三四〇頁〕

かつて琵琶を弾きながら歌っていた源典侍の「声」は、たいそう美しかった。ところが今、齡七十を越え、源典侍は「いと古めかしき咳」をして源氏を呼び止める。源典侍の美しい「声」しか記憶にない源氏は、彼女が自分で「名のり」をするまで彼女であることに全く気づかなかつたのだ。源典侍の「声」は、時を経て「いたうすげみにたる口つき思いやらるる声づかひ」「朝顔・四八三頁」になり果て、それでも源氏に戯れかかろうとする。かつて遊び心であつたとしても源氏が源典侍に近づいたきつかけは、彼女の美しい「声」だつたのだ。今、その「声」すら老いばれてしまつてゐる。先を急ぎたい源氏にとつて、源氏を引き止めた今の源典侍の「声」は、まさに「雑音」でしかない。「ごほごほ」という「雑音」をたてて開かない正門、そして延々と続く女五の宮の「声」に源氏は次々と足止めを喰らい、今またもや源典侍の「声」に行く手を阻まれる。物語は、源氏が朝顔のたつたへ「一声」を求めながらも容易に先へと進めない状況を、克明に語るのである。

源典侍の振り切つてようやく朝顔のもとにたどりついた源氏は、朝顔に「一声」を求めた。しかし、朝顔は「一声もいとまばゆからむ」「朝顔・四八五頁」と思い、「一声」すら源氏に聞かせることはしなかつた。源氏の「一言、憎しなども、人づてならでのたまはせん」という目的は結局果たされることなく、二度目の訪問は徒勞に終わつてしまつたのである。源氏の二度目の訪問は、朝顔の「一声」を聞く、という明確な目的があつたにもかかわらず、朝顔のもとに容易にたどり着くことがさえてできなかった。次々と足止めを喰らい、さらに、そこには異様な「雑音」が響きわたつてゐた。美しかったはずの源典侍の声でさえ、今は「雑音」となつて源氏に襲いかかるのである。源氏の耳は「雑音」に圍繞されるが、逆に源氏が求めていた肝心の朝顔の「声」は、「一声」たりとも聞くことができなかったのである。次々と源氏に襲いかかる「雑音」の数々。しかし、それこそが源氏と朝顔の關係性を暗示するものではなかつたか。経過する時間、そこに響きわたる「雑音」に、源氏と朝顔の關係性が集約されてゐるのである。

源氏の庇護下でようやく人並みの生活を送っていた末摘花邸は、源氏の須磨謫居後、たちまち困窮の底に沈んでいった。邸は荒れ果て、侍女たちも次々と去っていったが、末摘花だけは父母の遺言を守り通しながら、ひたすら源氏の帰京を待ち続けていた。しかしそんな末摘花の存在を、源氏はすっかり忘れてしまっている。帰京後の源氏は昔にまさる威勢を誇るが、それを耳にする末摘花の絶望感は募るばかりであった。ついには、叔母の策略で唯一の相談相手であった乳母子侍従をも失い、一人わびしく荒れた邸に取り残されることになる。しかしその翌春、末摘花は近くを通りがかった源氏に偶然見つけ出されて、実に十年ぶりの再会を果たすことになったのである。十年の時を経てようやく実現した再会のきっかけは、末摘花に仕える老女の「声」であった。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささかの人げもせず。(中略) いともの古りたる声にて、まづ咳を先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に対面たまはらむ」と言ふ。「それは外になんものしたまふ。されど思しわくまじき女なむはべる」と言ふ。声いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。(中略)「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬のしげさかな」とのたまへば、「しかじかなむたどり寄りてはべりつる。侍従がをばの少将といひはべりし老人なん、変らぬ声にてはべりつる」とありさま聞こゆ。[蓬生・三四六―三四七頁]

邸内を探っていた惟光が、邸のあまりの荒廢ぶりに引き返そうとすると、「いともの古りたる声」がすることに気づく。しかもそれは、「いたうねび過ぎたれど、聞きし老人」の「声」なのであった。末摘花が今もって「変らぬ御ありさま」[蓬生・三四六頁]であることを老女から聞き出した惟光は、急いで源氏のもとに戻り状況を報告する。ここで注目したいのは、「しかじかなむたどり寄りてはべりつる。侍従がをばの少将といひはべりし老人なん、変らぬ声にてはべりつる」と

される報告の内容である。惟光は、蓮の繁る邸周辺の様子や老女とのやりとりなどの詳細を源氏に報告する。しかし、物語はそれらを「しかじか」としてすべて省略し、唯一、「少将」という老女の「声」が「変らぬ声」であったということだけを具体的に語っているのだ。つまり、この報告の中心は「老女の声が変わっていなかった」ということであり、それは、他の様々な報告の内容がすべて省略されることによって、「老女の〈不変〉の声」というその一点だけが強調されるというしくみになっているのである。つまり、この場面での老女の「変らぬ声」とは、末摘花の孤独や屈辱、苦勞をすべて一人で抱え込みながら、それでも変わろうとしなかった末摘花の心の表象としての機能を果たしているよう。そして源氏も、惟光の「変らぬ声」という報告に、末摘花の「変らぬありさま」〔蓬生・三四七頁〕を連想して末摘花の心に感動し、その日のうちに末摘花との再会を果たしたのであった。

そもそも末摘花と源氏の出会いは、源氏が末摘花の「声」を求めるところから始まっていた。源氏は「故常陸宮の姫君（末摘花）が荒れた邸で琴を唯一の友として寂しく暮らしている」と聞き、大輔命婦に「ただ一声もよほしきこえよ」〔末摘花・二六八頁〕と取り次ぎを頼んだのであるが、それこそが末摘花への恋の始まりであった。その後、末摘花と契りを交わし、末摘花の醜い容貌を残らず見てしまった後も、源氏は変わらず末摘花の「声」を求めている。

「今年だに声すこし聞かせたまへかし。待たるものはさしおかれて、御気色のあらたまらむなむゆかしき」とのたまへば、「さへづる春は」とからうじてわななかしいでたり。「ざりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、「夢かとぞ見る」とうち誦じて出でたまふを、見送りに、添ひ臥したまへり。〔末摘花・三〇四頁〕

新年、源氏が重い足取りで末摘花のもとを訪れ、一夜を共に過ごした翌朝の場面である。前述したように、男が求める女の「声」とは、簾に隔てられ姿を見ることができない女の〈身体〉を想像するためのものであった。しかしこの場面は、すでに源氏と末摘花が契りを交わし、しかも源氏が朝日の照らす部屋で彼女の姿を残らず見てしまった後である。それでもなお末摘花の「声」を求め続けている源氏。末摘花の「声」を求めるところから始まった源氏と末摘花の関係は、源氏が

ようやく「声」を聞くことができた新年の場面をもって、ひとまず区切りがつけられることになる。

その後、源氏と末摘花の関係について語られることはなく、蓬生巻での十年ぶりの再会を迎えることになる。その時、再び源氏と末摘花を結びつけるきっかけになった惟光の報告が、「侍従がをばの少将といひはべりし老人なん、変らぬ声にてはべりつる」というものだったのだ。つまり、源氏にとって老女の「変らぬ声」とは、末摘花の「声」を求め続けた結果、ようやく耳にできた十年前の新年の「声」を思い起こすものであり、また彼女が十年前の新年の「声」のまま、十年間「変らぬ声」でそこにいることを確認検証させる機能をもっていたのだ。

前節、朝顔巻の老女の「声」は、朝顔の姫君の「一声」を求めていた源氏にとっては「雑音」以外の何ものでもなく、その「雑音」は源氏を引き止め、源氏を朝顔の「一声」に近付けぬ機能を果たしていた。老女の「声」は聞く者にとって「雑音」となり、そしてその「雑音」がもたらす違和感こそが、朝顔と源氏の関係性の違和を象徴しているのであった。しかし、蓬生巻の老女の「声」はそうではない。蓬生巻の老女の「声」はむしろ、末摘花と源氏を再び結びつける役割を果たしている。では、蓬生巻の老女の「声」は「雑音」ではなかったのだろうか。

いま一度、蓬生巻の老女の「声」と、それを報告した惟光の言葉を検討してみる。そのとき老女は、「いともの古りたる声」で「咳」をしながら惟光に話しかけていた。惟光はその「声」を聞いて、「声いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり」と判断している。老女の「声」は、惟光がたしかに聞いたことのある、記憶に残っている「声」ではあるけれども、十年前に比べるとその「声」は「いたうねび過ぎ」てしまっていた、ということなのだ。つまり、惟光の聞いた老女の「声」は、全く十年前と同じではなかったのである。老女の「声」が「いたうねび過ぎ」たのは、単に年月を重ねたというだけではなく、源氏の訪れが途絶えた後の生活の困窮による苦勞の蓄積が、老女の「声」をより一層聞き苦しい「雑音」にさせたのではあるまいか。それは老女だけではなく、女主人末摘花その人の醜女ぶりもより一層見苦しく、そして見窄らしくなっていることを予想させるものでもあったと思われる。



しかし、それらは物語によつて「しかじか」と省略された。そして、老女の「変らぬ声」、すなわち末摘花の心の「不變」だけが強調されたのである。この日の末摘花は、源氏から「かの花散里も、あざやかにいまめかしうなどはなやぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり」「蓬生・三五二頁」と評される。それは、源氏と末摘花再会の場面で、老女の「声」（≡雑音）（≡醜女ノイヌという末摘花の「咎」が捨象され、「変らぬ声」（≡不變）という美質を持つ末摘花）のみが強調されたためなのであつた。

#### 四 老女の「声」に宿る真実

本稿は、朝顔巻と蓬生巻に登場する老女の「声」に注目し、その「声」がどのようなものであり、またそれが聞く人物にどのように捉えられているかを検討することで、物語における老女の「声」の機能を明らかにすることを目的とした。

朝顔巻では、老女の「声」は、朝顔の「声」への期待膨らむ源氏を延々と引き止め、阻む役割を果たしている。結局、源氏が聞いたのは老女の「声」だけで、肝心の朝顔の「声」は「一声」たりとも聞くことができなかったのだ。皮肉なことだが、氾濫する老女の「声」とは、結局結ばれることなく終わった源氏と朝顔の関係性そのものである。そもそも源氏の朝顔への求婚は、紫の上を深い悲しみに陥れただけでなく、朝顔本人にとつても決して受け入れられるものではなかつた。この求婚は源氏の独り相撲だったのである。老女の「声」は、女君たちの心を置き去りにして一人歩きする源氏への警鐘として発されたものではなかつたか。だからこそ、源氏にとつて彼女たちの「声」は、聞き苦しい、さらに言うならば、聞きたくない「雑音」なのだ。飛躍を恐れずに述べるならば、朝顔や紫の上という女君たちの、心の奥深くに沈む「声」にできない真実の叫びは、女君たちに代わつて老女の「声」として源氏に投げ掛けられたのだともいえよう。「声」をあ

げられない女君たちの代弁者として。

一方蓬生卷では、老女の「声」こそが源氏と末摘花を再び結びつける役割を果たしていた。末摘花の「声」にならない真実の叫びは、老女の「声」を媒介とすることで源氏に伝えられたのである。しかし、このときの惟光の報告にあった老女の「声」とは、<sup>ノイ</sup>「雑音」が捨象された「声」なのであった。<sup>ノイ</sup>「雑音」は末摘花の数々の「咎」が捨象され、末摘花の（不変）の心だけが強調されるのである。そして源氏は末摘花の（不変）の心に素直に感動し、再会を果たすのであった。朝顔卷の老女の「声」は<sup>ノイ</sup>「雑音」が源氏と朝顔を遠ざけていたのに対し、蓬生卷の老女の「声」は<sup>ノイ</sup>「雑音」は、それが逆に捨象されたことによって源氏と末摘花を結びつけたのだ。

「声」をあげることや抑制され、鬱積している女君たちの真実の心は、現実の様々な障害とぶつかり合い、せめぎ合うことから生ずる軋みの音、すなわち、老女の「声」は<sup>ノイ</sup>「雑音」を媒介として響きわたっていく。語った言葉ではなく語るとき「声」そのものに注目するとき、<sup>ノイ</sup>「雑音」としての「声」は、確かにその存在感をあらわにしているのだ。

### 注

- (1) 宮田宏輔「源氏物語における「声」の表現空間論―柏木と女三宮の密通場面を焦点に―」（『王朝文学史稿』一九九〇年二月）
- (2) 吉井美弥子「源氏物語の「声」」（『論集平安文学3 平安文学の視角―女性』、勉誠社、一九九五年一〇月）、「物語の「声」と「身体」―薫と宇治の女たち―」（小嶋菜温子編『王朝の性と身体―逸脱する物語』、森話社、一九九六年四月）、「弁少将の「歌声」―光源氏と「高砂うたひし君」―」（『日本文学』第四五巻第五号、一九九六年五月）など
- (3) 「源氏物語と聴覚」（特集「源氏物語を読むための研究事典」、『國文學』第四〇巻第三号、一九九五年二月）
- (4) 永井和子「物語と老い―源氏物語をひらくもの」（『源氏物語と老い』、笠間書院、一九九五年五月）
- (5) 例えば、永井和子「声をあげる老者たち―源氏物語をひらくもの―」（『いま「源氏物語」をどう読むか』、おうふう、一九九

五年六月)においては、論文中に「声」ということばを多用しているものの、その意味するところは「発言」もしくは「会話」であって、「声」のありようや「声」そのものの意味については全く触れられていない。

(6) 「声」そのものだけではなく、老女に關しては「声」を出すときに伴う「咳」などもこれに含まれよう。

(7) 引用は、すべて新編日本古典文学全集「源氏物語」(小学館)に拠る。なお引用文には私に傍線等を付し、末尾に卷名・頁数を記した。

(8) 吉井美弥子「物語の「声」と「身体」——薫と宇治の女たち——」(小嶋菜温子編「王朝の性と身体——逸脱する物語」、森話社、一九九六年四月)

(9) 小林正明「自閉庭園の美しき魂——朝顔姫君論——」(鈴木日出男編「国文学解釈と鑑賞別冊 文学史上の「源氏物語」」、至文堂、一九九八年五月)

なお、氏は、「竹取物語」や「枕草子」に描かれている門などを検討して、王朝文学の「門」には、「権勢のみならず、性や身体としての女そのものをも、表象しうる」とし、朝顔邸の錠の錆びた正門は、「邸宅の女主人である朝顔姫君の抵抗を、物理的に暗示するような印象を醸しだしている」と言っ。

(博士後期課程三年)